

難波宮（645～654）



●飛鳥宮の位置がよくわからなかったの、わかりやすい難波宮を調べてみた。ここは 15 年ほど前に訪ねたことがある。

蘇我入鹿は乙巳の変において中大兄皇子、中臣鎌子らにより討たれ蘇我氏は滅んだ。天皇制の始まり、元号の始まりである大化の改新とよばれる革新政治が始まった。

■難波宮

天皇の住まい、政治、儀式の場をはっきりした構造は難波宮が最初であり後の宮にも採用された。また、難波宮から日本という国号、元号の使用が始まったとされ、孝徳天皇は改新の詔を発しその第 2 条で初修京師として難波宮を日本初の首都とした。跡地は国の史跡に指定されている（指定名称は「難波宮跡 附 法門坂遺跡」）。

乙巳の変（大化元年〈645 年〉）ののち、孝徳天皇は難波（難波長柄豊崎宮）に遷都し、宮殿は白雉 3 年（652 年）に完成した。この宮は建物がすべて掘立柱建物から成り、草葺屋根であった。『日本書紀』には「その宮殿の状、殫（ことごとくに）論（い）ふべからず」と記されている。

●まずは大沼からつなげてみた。



■難波宮大極殿 → 戸隠神社九頭龍社 → 大沼浮島

■大沼浮島（役の小角・弁財天）

湖畔にある大沼浮嶋稲荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505 年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳9年(681)役の小角が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川(朝日町大谷)のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稲荷大明神を祀り、弟子覚道を別当(大行院)とし朝日岳修験が行われた。739年には行基が訪れ浮島66個に国の名前を付けた。建久4年(1193)には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。

山形県西村山郡朝日町大沼

備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。出雲族東王家の富家の人々は出雲から大和の葛城山東側に移り住んだとされる。役の小角の生誕地は奈良県御所市茅原。まさに葛木山の東に位置する。大沼を「大富沼」、大朝日岳の神を「大富権現(弁財天)」と名付けたのも役の小角だろう。役の小角が天孫族秦氏の稲荷神を祀ることはありえない。なにより伏見稲荷よりも古い歴史になってしまう。730年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるので、その時に秦族がやってきて主祭神を弁財天(瀬織津姫)から稲荷神に変えたのだと思われる。徐福が連れてきた海童たち秦族は蓬莱島信仰を持つ。自由に動き回る浮島は相当に魅力的だったはず。古い祭祀線はほとんどが稲荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島(弁天島)」(写真)が起点となっている。



■戸隠神社九頭龍社

祭神/九頭龍大神 由緒・ご鎮座の年月不詳ですが、天手力雄命が奉斎される以前に地主神として奉斎され、心願成就の御神徳高く特別な信仰を集め、また古来より水の神、雨乞いの神、虫歯の神、縁結びの神として尊信されています。

●戸隠神社の創建

一説には現在の奥社の創建が孝元天皇5年(紀元前210年)とも言われるが、九頭龍社の創建はこの奥社よりもさらに古いとされている。伝承では、この地の地主神である九頭龍大神が、天手力雄命を迎え入れたといわれている。縁起によれば、飯縄山に登った「学問」という僧が発見した奥社の地で最初に修験を始めたのが嘉祥2年(849年)とされている。また『日本書紀』の天武紀には684年三野王(美努王)を信濃(現在の長野県)に派遣して地図を作らせ、翌685年に朝臣3人を派遣して仮の宮を造らせ、691年に持統天皇が使者を遣わし、信濃の国の須波、水内などの神を祭らせたとされていて、この水内の神が戸隠神社とする説もある。当神社の御神体である戸隠山の名称は、天照大神が籠っていた天の岩戸を天手力雄命が力まかせに投げ飛ばしたとき、その一部が飛んできて山になったという伝説から生じている。長野市戸隠3506

●戸隠神社の奥社ではなく、九頭龍社をラインは通った。奥社の創建が孝元天皇5年(紀元前210年)とも言われるが、九頭龍社の創建はこの奥社よりもさらに古いという。地主神の九頭龍大神が天手力雄命を迎え入れたというのは、まさに出雲聖地を天孫族が支配した国譲りのことを伝えているのだと思う。それにしてもなぜここに岩戸開きの岩が飛んできたことになったのか。岩戸は遮る・封じる・隠すなど意味を感じるので、大沼・大朝日岳に対しての蝦夷封じだったのではだろうか。次は大朝日岳を見る。



■二子塚古墳

宇治市五ヶ庄の「二子塚古墳」は、宇治川右岸にあり、現在は公園として整備されている。「五ヶ庄二子塚古墳」とも呼ばれている。俗称として、「段ノ山」と呼ばれていた。周辺の宇治古墳群の一つであり、京都府下で唯一の本格的な二重周濠を備えた前方後円墳になる。

◆歴史年表

古墳時代後期前葉(6世紀前半)、二子塚古墳が築造される。

平安時代、1103年、旧9月、古墳は「二子墓」と記されている。

(藤原忠実『殿暦』)

1150年、旧7月、「二子陵」と記されていた。(藤原頼長『台記』)

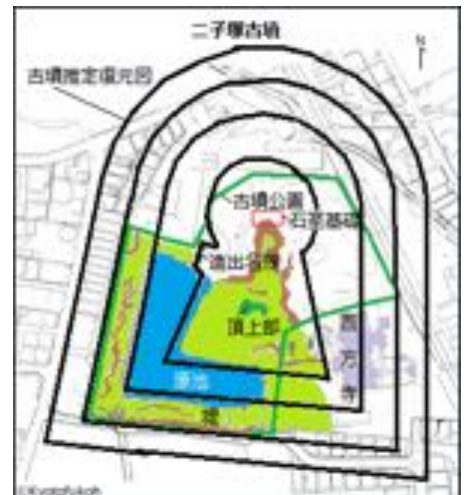
1115年、「ふたこつか」と詠まれている。(『俊頼髓脳連歌』)

近代、1914年-1915年、京阪宇治線の建設に伴い、二子塚古墳の後円部は土取りにより破壊された。

1987年、後円部の発掘調査が行われ、石室基礎が発見される。

京都府宇治市五ヶ庄大林50

※サイト「京都風光」さんより抜粋



■臨泉山 聴信寺 詳細不明 滋賀県米原市井之口

■米原市朝日

●朝日の付く地名なのと、上記聴信寺のすぐ近くなので参考に記載しておく。わずかにラインから逸れるが南西方向には鳥羽上城跡がありその山頂も通っている。ここに太陽や大朝日岳の遥拝所があったのかもしれない。

■飛騨総社

旧社格は県社。飛騨国の総社である。延喜式神名帳所載八座（大野郡三座、荒城郡五座）と国史記載社十座を祀る。平安時代の承平年間（931年～938年）の創建と伝えられる。1191年（文治2年）に最初の社殿が築かれる。しかし、室町時代になると衰退する。江戸時代の寛永年間に金森重頼により社殿の大改修が行われたが、1781年（天明元年）の天明の大飢饉の頃から再び衰退し、境内も縮小される。

国学者である田中大秀（本居宣長門弟）は、その様子を嘆き、1808年（文化3年）に「飛騨総社考」を著して再興を願う。これをきっかけに1820年（文政3年）に再建され、境内も拡大する。本殿は拝殿と一体となり珍しい造りの社殿となっている

正殿主神 /大八椅命 最初の斐陀国造、天火明命の後裔。

脇殿（延喜式神名帳所載八座）

水無神 （飛騨一宮水無神社祭神 位山）※出雲神聖地

槻本神 （槻本神社祭神 大山津見神）※出雲系

荏名神 （荏名神社祭神 高皇産靈神）

大津神 （大津神社祭神 大彦命、武渟河別命）※長髓彦と息子
荒城神 （荒城神社祭神 大荒木之命）
高田神 （高田神社祭神 高魂命）
阿多由太神 （阿多由太神社祭神 大物主神） ※事代主命
栗原神 （栗原神社祭神 五十猛命）※大国主の娘高照姫に婿に入った天火明命の子

脇殿（国史記載社十座）

大歳神 ※五十猛命 出雲の御歳神（幸神）信仰だった五十猛は大歳彦と名乗っていた。
走淵神 四天王神 遊幡石神 渡瀬神 道後神 気多若宮神 本母国津神 剣緒神 加茂若宮神

岐阜県高山市神田町 2-114

●飛騨総社は平安時代の創建なので信憑性は薄いと思ったが、主祭神は天火明命の後裔とある。出雲口伝によると天火明命は徐福（饒速日・素盞鳴）であり天孫族の長でもある。ところが脇殿の祭神は出雲族の重要な神々が並ぶ。（※で出雲口伝の注釈を入れた）ここも出雲聖地を天孫族が支配した歴史なのだろう。とすれば、平安時代以前よりここには神社があったと考えられる。おそらく社殿を持たない大歳神社だったのでは…

●二子塚古墳は危うく見逃すところだった。手前のライン近くにいらした二子塚地蔵さんに教えてもらった感じ。航空写真で見ただけではただの円墳に思えてしまっていたが、調べてみたら立派な前方後円墳が線路を作るために破壊されていたことがわかった。見つかった石室基礎の位置と照らし合わせると見事にライン上に乗ってきた。同時期の大王墓である今城塚古墳（大阪府高槻市）と相似形にある可能性が指摘されているので、同じ位の重要人物の墓と言える。

●湯殿山神社ご神体岩からもつなげてみたが、乗ってくる寺社はなかった。

2026 年元日 竜天太陽 記